

新しい「教育漢字」の理解度について

岡 墻 裕 剛

I. 「常用漢字表」の改定

現代日本における漢字の使用の目安としては、平成 22 年内閣告示第 2 号の「常用漢字表」(2010)が存在する。これは、「法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般の社会生活において、現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安を示す」もので、字種として 2136 字について例示字形(前書きでは「字体」とともに音訓・用例(前書きでは「語例」と呼ぶ)を示す。この表は、同名の「常用漢字表」(1981)の 1945 字から 196 字追加・5 字削除を行い、2136 字へと改定したもので、この改定については、広く一般から意見募集が行われ、国民的な議論に発展したことは記憶に新しい。

本表に先立つ「改定常用漢字表」(平成 22 年 6 月 7 日文化審議会答申)において、この表の作成は「平成 17 年 3 月 30 日の文部科学大臣諮問に基づくもの」であり、その作成の理由として次の 3 点を強調している。すなわち、パソコンや携帯電話などの情報機器の普及に伴う社会変化への対応、またそれに付随する手書き機会の減少、固有名詞の扱いについての基本的な考え方の整理、である。つまり、これら 3 点は、検証が必要な課題ということになる。

II. 「教育漢字」の変更

上述の 3 点目の固有名詞については、従前は漢字使用・制限の例外として設定されていたものである。しかし、「常用漢字表」(2010)では、前書きの 3 において、以前の「この表は、固有名詞を対象とするものではない。」から「この表は、都道府県名に用いる漢字及びそれに準じる漢字を除き、固有名詞を対象とするものではない。」(以下、傍線は稿者)へと変更され、都道府県名の漢字が取り入れられている。

この変更に伴って、学校教育における漢字使用についても変更が加えられる。小学校においては「小学校学習指導要領」という基準が存在し、その中の「学年別漢字配当表」では、いわゆる「教育漢字」と呼ばれる小学校で学習すべき漢字の一覧表が示されている。この「教育漢字」は、1989 年以降 1006 字であったが、2017 年(平成 29 年)に改訂され 2020 年度から実施される「小学校学習指導要領」では、「茨、媛、岡、潟、岐、熊、香、佐、埼、崎、滋、鹿、縄、井、沖、栃、奈、梨、阪、阜」の 20 字が増補され 1026 字へと変更されることとなった。

これらの追加字種はいずれも都道府県名に関するもので、社会科において 47 都道府県について学習する第 4 学年へと配置されることとなった。上記のうち、「潟、岐、香、佐、崎、滋、縄、井、沖」の 9 字はすでに「常用漢字表」にあったものだが、「茨、媛、岡、熊、埼、鹿、栃、奈、梨、阪、阜」の 11 字は 2010 年の改定で「常用漢字表」に追加されたものである。また、都道府県名の漢字として、第 5 学年に配当されていた「賀、群、徳、富」と、第 6 学年に配当されていた「城」という合計 5 字が、第 4 学年へ追加されるという変更も併せて行われた。一方、第 4 学年からは、「圀、紀、喜、救、型、航、

告、殺、士、史、象、賞、貯、停、堂、得、毒、費、粉、脈、歴」の21字が第5学年へ、「胃、腸」の2字が第6学年へと移動されることになった。つまり、新しい「教育漢字」は、新「常用漢字」で追加されさらに「教育漢字」にもなった11字、新旧ともに「常用漢字」であったものが「教育漢字」にいわゆる「格上げ」された9字、元々「教育漢字」で他学年から配当が変更された5字、という3パターンが存在するのである。本稿では以下この3種を、教育漢字 α 、教育漢字 β 、教育漢字 γ 、と呼び分けることとする。

「小学校学習指導要領」においては、改訂前から「47 都道府県の名称と位置」が目標として掲げられていたために、直接的な記述としての大きな変更ではない。しかし、都道府県名の漢字の習得については、「教育漢字」という扱いではなかったために、これまでの学習では担当する教員各自の裁量に任されていた部分が多い。つまり、「常用漢字表」の改定に伴ってこの習得を徹底しようとしたわけであり、これまでダブルスタンダードであった状況の修正を意図したと見ることができる¹⁾。

上記字種は、「常用漢字」化から丸8年が経過し、当時の小学4年生(9・10歳)は2019年度に大学の新生入生として入学する。「常用漢字」は一般社会生活の目安であり、「学習指導要領」の上では義務教育において学習することが明記されており、高等学校においても、その読み書きの定着が図られるため、大学入学時にはある程度理解していなければならない指針の一つである。また、今後もこれらの字種の理解の度合いを経年的に計ることによって、教育漢字の学習成果を捉えることができる。このような観点から、本稿では大学生の新しい「教育漢字」の理解度を計測することとした。

III. 新しい「教育漢字」の調査

本稿での調査は、次のとおりに行った。

調査対象：神戸女子大学日本語日本文学科1・4年生 計169人（有効回答169）

調査時期：2018年5・6月

調査方法：次の質問への書き取り形式（集団による一斉回答、授業内で実施）

1. あなたの出身地(成人以前に最も長く住んだ地域)を都道府県名で答えてください。
2. あなたの年齢を答えてください。
3. 次の府県名を漢字で書いてください。

いばらき、えひめ、おおさか、おかやま、おきなわ、かがわ、かごしま、ぎふ、くまもと、ぐんま、さいたま、さが、しが、とくしま、とちぎ、とやま、なら、にいがた、ふくい、みやぎ、やまなし

入学試験の区分にもよるが、この学科は偏差値として概ね50程度、学科の特色からも一般的な大学生レベルの回答が期待できる。質問1・2は参考程度に、本稿では主に3への回答を分析する²⁾。

「教育漢字」は全て「常用漢字表」に存在する字種であるが、一般に「教科書体」と呼ばれる「学年別漢字配当表」の手書き風の例示字体は、「常用漢字」の例示字体とは形が異なることも多い。そこで、手書きされた漢字の正誤の認定については、[佐藤1998]³⁾と[岡崎裕剛2016]⁴⁾を参考に、字種における誤

字(誤字種)と字体における誤字(誤字体)の2段階で捉え、個人の書き癖や個々の筆者における揺らぎと見られる字形レベルのものは対象としないこととした。

3で取り上げた21の府県は、第4学年へと追加された字種を用いた具体例であるため、熟語としては従来の「教育漢字」も含むことになる。「おきなわ」(沖縄)と「ぎふ」(岐阜)は新「常用漢字」で追加された教育漢字 α による組み合わせであり、「ぐんま」(群馬)、「とくしま」(徳島)、「とやま」(富山)は配当が変更された教育漢字 γ をもつものである。

質問1・2に対する回答は次のとおりである。

表1 回答者の出身地と年齢 (N=169)

出身地	回答数	年齢	回答数
兵庫	103	18	51
大阪	23	19	47
香川	12	20	34
和歌山	4	21	28
島根, 山口, 岡山, 高知, 徳島	3	22	8
大分, 広島	2	20代(ママ)	1
鳥取, 長崎, 三重, 宮崎, 愛媛, 石川, 滋賀, 新潟	1		

兵庫県が過半数を占め、ついで大阪府が多い。基本的に近畿・四国・中国・九州地方といった西日本の出身者がほとんどで、それ以外の地域は石川県と新潟県が1人ずついるのみであった。年齢としては、18～22歳という4年制大学在学者の一般的な年齢層と一致する。1件のみ「20代」という具体的な年齢を曖昧にした回答があった。

質問3について、それぞれの府県名の正答率とその順位は次のとおりである。

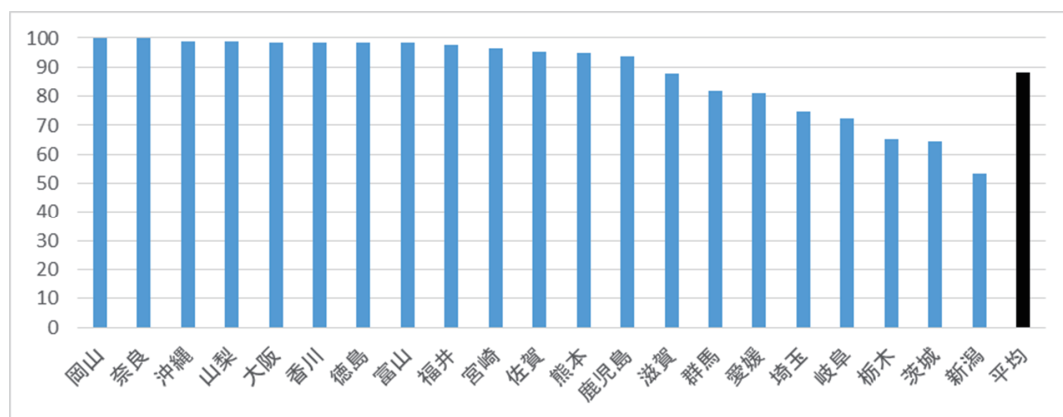


図1 各府県名の正答率

1 位岡山・奈良(100%), 3 位沖縄・山梨(98.8%), 5 位大阪・香川・徳島・富山(98.2%), 9 位福井(97.6%), 10 位宮崎(96.4%), 11 位佐賀(95.3%), 12 位熊本(94.7%), 13 位鹿児島(93.5%), 14 位滋賀(87.6%), 15 位群馬(81.7%), 16 位愛媛(81.1%), 17 位埼玉(74.6%), 18 位岐阜(72.2%), 19 位栃木(65.1%), 20 位茨城(64.5%), 21 位新潟(53.3%)

全体の正答率(平均)は 88.0%で、2・3 問程度を誤った回答が多い。割合から見ると、13 位鹿児島までのほぼ全員が書くことができる易問のグループ、14 位滋賀から 18 位岐阜までの少し間違いが目立ち始めるグループ、19-21 位の栃木・茨城・新潟の 3 人に 1 人以上が間違える難問のグループ、に区別できそうである。以下では、それぞれのグループについて、具体的な誤字の例を挙げつつ検討したい。

①1-13 位 (易)

「岡山」と「奈良」は、誤答がなく正答率 100%であった。「岡」と「奈」はともに新たに「常用漢字」に追加された教育漢字 α であるが、その理解度は高い。これは、両者はともに既に人名用漢字であったためによく知られていたと推測される(ただし、「岡」は一般的には子の名付けには使用しない)。また、「良」(ラ)は慣用的な音読みであり、例外的な読みとして「常用漢字表」の「備考」欄に示されるものではあるが、やはり容易に理解されることが分かる。

次いで、「沖縄」と「山梨」であるが、誤答としては「繩」の傍の縦棒を上貫いたものと上部に点を加えたもの、「梨」の「利」部分を「刊」としたものと無回答のものがあつた。前者については、「亀」のような字体と混淆した誤字体であると思われる。前者の「沖」と「繩」は元々「常用漢字」であつたものが新たに「教育漢字」へと格上げになった教育漢字 β で、後者の「梨」は新規に「常用漢字」となった教育漢字 α である。「沖」と「山」については、誤字はなかった。

「大阪」は「坂」という異体字、「香川」は「香」の無回答と「加」、「徳島」は「徳」の無回答と「イ」と「イ」・「ㇿ」と書く誤字体、「富山」は「富」の無回答と「富」という異体字があつた。「阪」は新規に「常用漢字」となった教育漢字 α であるが、造語力が弱く、「大阪」以外の熟語で使うことがないため、字体としての存在が認識されていなかった可能性が指摘できる。「香」は音読み「コウ」の印象が強く訓読み「か」を想起できなかったものだろう。「富」は教育漢字として配当学年を下げた教育漢字 γ だが、訓読み「とむ」から「と」を思い起こせなかったと思われる。同じく「徳」も教育漢字 γ であるが、字体を正確に把握していない誤答である。

「福井」は「福」の「福」「副」、「宮崎」は「崎」の異体字「崎」と「可」部分を「句」「司」のように書いたもの、「佐賀」は 2 字とも無回答と「佐」のみ無回答、「嵯峨」や「岐峨」と書いたものがあつた。「福井」はそもそも教育漢字 β である「井」が調査対象だったのだが、「井」ではなく、第 3 学年の教育漢字である「福」に誤りが出るという結果になった。「嵯峨」の例とも併せると、漢字の難易度とその漢字を正確に書けるかどうかはそれほど相関しないと言える。

「熊本」は「熊」の「能」「態」という誤字種、「鹿児島」は「鹿兒」の無回答と「鹿」の「比」を「島」のように書いたもの(3 字目と混淆したか)、「児」の「子」「古」「護」・無回答があつた。「熊」と「鹿」

とはどちらも動物を表す新規の「常用漢字」の字種である。「熊」を、本来は別の字種ではあるが、ほぼ同じ筆画で構成される「態」と誤るのは、「大阪」の「坂」と同様に字体の存在を認識していなかったものと推測される。「鹿児島」に関しては、「鹿」よりもむしろ「児」を回答できないものが多い。「奈良」同様に「常用漢字表」の「備考」欄に示される例外的な読みではあるが、「ご」という読みと結びつけるのが少し困難であったということになる。

②14・18 位（並）

「滋賀」は、「滋賀」の無回答が最も多く、次に「賀」のみを書いて「滋」を無回答とするものが多い。さらに、「滋」を「𠂔」や「𠂔」とする誤字体、「志」とする誤字種があった。「滋」は元々「常用漢字」であった教育漢字 β であるが、理解度は高くないと言える。

「群馬」は、「馬」に誤りはなく、「群」を「郡」と誤るものがほとんどであった。この 2 字はともに「教育漢字」であるが、現行の「学習指導要領」では「郡」が第 4 学年配当字、「群」が第 5 学年配当字で学習する学年が異なる。地名としては「加古郡」のように前者を使う機会が多いため、錯誤したものと思われる。しかし、新しい「学習指導要領」ではともに第 4 学年の配属となるため、両者の差異を把握しやすくなり、混同することが少なくなるかもしれない。また、「群」の偏である「君」を「馬」とした「駢馬」が 2 件あった。これは 2 字目と混淆したものであるが、個人が字体を誤って覚えているのではなく、字形実現上の単なる書き誤りである可能性が高いが、複数人が同じ誤字を生成してしまうのは興味深い。

「愛媛」は、「愛媛」の無回答が 3 件、「媛」のみの無回答が 4 件あったが、それ以外は誤字であった。「媛」を「姫」とする誤字種が多かったが、「媛」の旁は書けても偏を「才」「日」「木」「目」「糸」と書き誤るものもあった。また、1 字目を「愛」の代わりに「媛」と書き、2 字目を無回答や「姫」とするものが複数あった。さらに、2 字目を「媛」と 1 字目と混淆した誤字体にするものが 2 件あった。これは前述の「駢馬」と同じく単なる書き誤りなのか、あるいは 2 字目を思い出せなかったために出現したものなのか判断が難しい。

「埼玉」は、「玉」には誤りがなく、「埼」について無回答と「崎」という誤字種で書くものがほとんどであった。この誤りは 21 件にも及び、「阪」・「熊」と同様に「埼」字体の存在を認識していないものと思われる、この類いでは最多であった。誤字体としては、偏を「王」「大」という熟語の中の部分字体に書き誤ったものがそれぞれ 3 件と 2 件あった。また、「宮崎」と同じく「可」を「句」とするものがあった。

「岐阜」は、「岐阜」全体の無回答が 17 件で最も多く、「岐」のみの無回答と「阜」のみの無回答がそれぞれ 4 件ずつあった。「岐」については、「支」「城」や偏を誤った「伎」「技」「枝」などの誤字種が多く見られた。「阜」については、「十」部分を「木」にしたものや「自」のみを書いたものがあった。また、字体そのものの誤りとは言えないが、「阜岐」や「阜府」と、2 字目の「阜」を 1 字目に入れ替えたものが 10 件ほどあった。熟語を構成する要素として「阜」を認識していながらも、その音を把握していなかったための錯誤である。

③19-21位（難）

「枅木」は、「枅木」の無回答と「枅」のみの無回答がそれぞれ 11 件ずつあった。「枅」については、「析」15 件、「枅」5 件あったが、この他にも旁を「片」や「方」に似た 1 画少ないような誤字体を書くものが多数あった。「枅」は新規常用漢字であり、「常用漢字表」(2010)の「(付) 字体についての解説」の「第 1 明朝体のデザインについて」の「4 特定の字種に適用されるデザイン差について」の(5)において、旁を「𣏟」と書く例が示されている。



図 2 「枅」の字体

「学年別漢字配当表」の教科書体とは見た目の字形が異なるが、「厂」+「万」という単純な構成要素からなる字体であることがあまり理解されていないようである。「木」については、「城」を書いたものが 2 件あったが、それ以外は正答だった。「枅木」全体の無回答は、「枅」が分からなかったために、「木」も書くのを諦めたものと思われる。

「茨城」は、「茨城」全体の無回答が 5 件、「茨」のみの無回答が 8 件あった。「茨」については、部分字体を「𣏟」や「竹」にするものや、「萩」「次」「芝」とする誤字種があった。また、「茂木」も 4 件あった。「城」については、「木」に誤ったものが 45 件あった。これは大阪府の「茨木市」（いばらきし）と混同したのか、あるいは「キ」という読みと「城」という表記とが結びつかなかったのかのどちらかであるだろう。「城」は第 6 学年から配当が変更された教育漢字 γ ではあるが、「茨城県」に使用するという認識は低いようである⁵。今回は兵庫・大阪を中心とする西日本出身者の回答のみであったため、全国における理解度の調査については稿を改めたい。

「新潟」は、53.3%と正答率が最低だったが、無回答はなく、「新」の誤りもなかった。つまり、およそ半数が「潟」を書けなかったことになる。1 件のみ「𣏟」という誤字種を書いたが、それ以外は必ず「𣏟」を書いた上で旁を誤った字体であった。「潟」の誤字体には、旁の上部と下部で部分字体にある程度の共通性があり、その組み合わせによって誤字体が創出される。それぞれを見ると、上要素では、「白」4 件、下の横画が離れた「𣏟」24 件、上の横画が余分にある「𣏟」15 件などがあった。下要素では、「勿」51 件、「勿」よりさらに左払いが 1 本多いものが 2 件、「易」のように横棒を加えるものが 9 件などがあった。また、これらの要素は同時に出現するものも場合もあり、総計では 20 の誤字体が確認された。「潟」は元々「常用漢字」ではあったが、その理解度は極めて低かったことが分かる。

IV. 分析

上記の調査結果に基づいて分析を行う。新しい「教育漢字」を単漢字に分け、その出自に基づく 3 パターンごとに理解度(正答率)を集計すると表 2 となる。

表 2 単漢字の正答率

α 平均	88.2%	β 平均	89.6%	γ 平均	88.8%
岡	100.0%	沖	100.0%	徳	98.2%
奈	100.0%	井	100.0%	富	98.2%
梨	98.8%	縄	98.8%	賀	95.3%
阪	98.2%	香	98.2%	(佐)賀	95.9%
鹿	98.2%	崎	96.4%	(滋)賀	94.7%
熊	94.7%	佐	95.3%	群	81.7%
茨	85.2%	滋	87.6%	城	70.4%
愛	81.1%	岐	74.6%		
埼	74.6%	潟	53.3%		
阜	72.2%				
栃	65.1%				

表 2 の中で正答率の低かったもの、つまり誤答の多かった漢字は、順に 1 位「潟」、2 位「栃」、3 位「城」、4 位「阜」、5 位「岐」・「埼」である。「潟」がワーストであり約半数が書けず、続く「栃」は 3 割強が書けない。両者の正答率は、それぞれ「新潟」と「栃木」の正答率と一致しており、この字体が難解であったことを示す。都道府県名としては、ワースト 2(20 位)の正答率だった「茨城」は、「茨城」を「茨木」と書いた誤答が多く「城」が上位になるが、「茨」単体で見ると誤答率は 14.8%にまで下がる。これに関しては、都道府県名の漢字の覚え間違いが原因だと思われるので、他の誤字体とは少し傾向がやや例外的なものと言える。続く「阜」と「岐」はともに 2 割代後半で、「岐阜」での正答率とあまり変わらず、どちらの字体もそれなりに書けなかったことが分かる。「埼」は「埼玉」の正答率と一致しており、やはりこの字体のみが書けなかったことになる。

パターンごとに確認すると、正答率の平均値は高い方から順に、教育漢字 β (89.6%)、教育漢字 γ (88.8%)、教育漢字 α (88.2%)である。教育漢字 α は、改定により「常用漢字表」に追加された字種がさらに「教育漢字」になったものであるため、理論上は最も目にする機会が少なく理解度も低いことが想定される。実際に平均値でも最低の数値を示す。残る 2 種については、学年配当が変更されただけである教育漢字 γ の方が、新たに「教育漢字」になった教育漢字 β よりも容易であるはずだが、実際の数値は逆転している。これには、「郡」に混同された「群」と、先ほど例外的だと判断した「城」の数値の低さの影響がある。つまり、都道府県名という固有名詞の表記においては、漢字そのものの難易度だけでなく、運用面での困難さも伴うことがあると言える。

次に、年齢ごとの正答率を確認する⁶。

表3 年齢別の正答率（年齢・回答数以外の数値は%）

年齢	回答	岡山	奈良	沖縄	山梨	大阪	香川	徳島	富山	福井	宮崎	佐賀	熊本	鹿児島	滋賀	愛媛	群馬	埼玉	岐阜	栃木	茨城	新潟	平均
18	51	100.0	100.0	96.1	100.0	98.0	96.1	98.0	100.0	94.1	98.0	94.1	92.2	92.2	92.2	90.2	86.3	82.4	76.5	72.5	78.4	62.7	90.5
19	47	100.0	100.0	100.0	100.0	95.7	100.0	95.7	97.9	97.9	97.9	95.7	93.6	97.9	91.5	83.0	87.2	80.9	76.6	72.3	70.2	59.6	90.2
20	34	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	97.1	100.0	94.1	100.0	94.1	97.1	79.4	76.5	76.5	73.5	76.5	67.6	64.7	41.2	87.5
21	28	100.0	100.0	100.0	96.4	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	96.4	92.9	100.0	85.7	85.7	67.9	75.0	60.7	53.6	42.9	39.3	42.9	82.8
22	8	100.0	100.0	100.0	87.5	100.0	87.5	100.0	87.5	100.0	87.5	87.5	100.0	87.5	75.0	87.5	62.5	50.0	62.5	37.5	37.5	50.0	80.4
全体	169	100.0	100.0	98.8	98.8	98.2	98.2	98.2	98.2	97.6	96.4	95.3	94.7	93.5	87.6	81.7	81.1	74.6	72.2	65.1	64.5	53.3	88.0

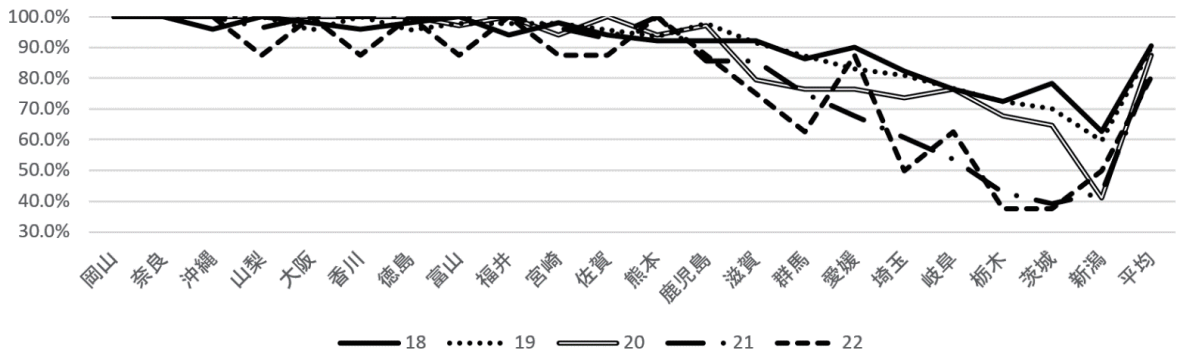


図3 年齢別の正答率

年齢とともに回答数が減少し、また 22 歳はサンプルが 8 件とかなり少ないために参考程度のものと捉えるべきではあるが、図表からは概ね加齢とともに正答率が下がる傾向が読み取れる。特に右側の難問（「群馬、埼玉、岐阜、栃木、茨城」）における、21 歳・22 歳の正答率の下がり幅が他に比べてやや大きく、これが「平均」の正答率低下に繋がっている。「常用漢字表」の改定に伴う影響が現れ始めるのは 2019 年度以降と予測されるため、この数値の低下には他の理由を推測しなければならない。

推測できる 1 点目の理由は、大学の入学年度による成績の差異である。大学では、入学年度によって入試の難度が異なることがあり、各学年には必然的に成績差が生まれる。よって、この低下は単なる誤差の範囲のものであるかもしれない。2 点目の理由としては、加齢による知識レベルの低下である。大学生は学年進行とともに、大学入学時には持ち合わせていた学問的な知識レベルが後退することがあることは広く知られているので、それが原因かもしれない。

V. まとめ

以上、本稿では、都道府県名に用いられる新しい「教育漢字」について、大学生の理解度を調査し、その傾向を分析した。同じように「教育漢字」というカテゴリーに分類される漢字群であっても、理解度、すなわち難易度に大きな差があることが明らかであった。誤字の出現形式としては、うろ覚えで存在しない字体を実現してしまう例や、より身近で容易な字体へと置き換えてしまう例、類似した読みの

漢字を混同する例、前後の漢字の順序を入れ替えたり字体そのものを混淆したりする例などさまざまであった。また、新しい「教育漢字」は、その出自に従って3パターンに分けられるが、それぞれの理解度(正答率)にはそれほど大きな差異が見られなかった。年齢ごとの正答率では、加齢とともに低下傾向があった。その原因については、本稿の調査だけでは解明できないため、今後も同様の調査を行い、新しい「教育漢字」と「常用漢字」の定着の動向について、理解を深めたい。

また、都道府県名の理解については、生まれ育った地域と影響関係があると推測される。西日本出身者のみの調査となった本稿では、「群馬、埼玉、岐阜、栃木、茨城、新潟」などの正答率が他よりも明確に低かった。そのため、今後は全国レベルでの調査を行うことで、調査対象者の出身地域の偏りを解消したデータを検証したい。

¹ また、現行の教科書では移行期間における特例として、新しい基準による漢字学習指導を行っている。

² 質問3では、都道府県名に対する「府」・「県」といった **prefecture** を示す表記を省略した設問とした。本稿でも以下、特に明示しない。

³ 佐藤栄作(1998)「「誤形字」を考える—字体研究と文字教育をつなぐために—」, 愛媛大学教育学部国語国文学会『愛媛国文と教育』31

⁴ 岡崎裕剛(2016)「誤字と漢字教育の関係性」, 石塚晴通監修／高田智和・馬場基・横山詔一編『漢字字体史研究 二』

⁵ 「城」＝「き(ぎ)」については、「宮城県」での調査を行った方が、この字種についてのより適切な結果を導き出せたものを思われる。

⁶ 年齢を「20代」とした回答は、年齢別の集計からは除外したが、全体には含んだ。